

つなげるサービス、つながったりハ ― Bさんの事例報告 ―

(発表者) 財団法人 日本盲導犬協会 仙台訓練センター 畑野容子
(共同研究者) 財団法人 日本盲導犬協会 仙台訓練センター 原田敦史
財団法人 日本盲導犬協会 仙台訓練センター 内田まり子

1. はじめに

当協会では、利用者が、サービスの形態や訓練科目を選択し、組み合わせて利用できるようにすることで、様々なニーズに対応したいと考えている。さらに訓練後の生活支援の幅を広げるために、仙台市内在住の利用者に対しては、他の団体と連携してサービス提供している。

ここでは、これらのサービス提供と連携体制が有用であったBさんのケース報告を行う。

2. 仙台市での在宅訓練について

仙台市在住者については、訓練事業委託元である仙台市身体障害者更生相談所（以下、更生相談所）、相談事業を受託している仙台市中途視覚障害者支援センター（以下、支援センター）と、連携して在宅訓練を実施している。

3. ケース紹介

Bさん。50代、女性。仙台市在住、夫と二人暮らし。網膜剥離により10代で全盲。難聴、両下肢機能障害あり。数年前まで理療の職に就いていたが、両下肢機能障害のため退職、以後在宅。歩行にはサポートケーンを利用。これまでに生活訓練を利用したことはない。

2006年頃から、当協会の短期リハビリテーション（短期入所型生活訓練、以下短期リハという）については知っていたが、体調が優れないため、何日も継続して訓練を受けられないと思い参加を見送っていた。

4. 訓練の経緯

以下の報告では、Bさんの希望に対して、当協会と仙台市の支援センター、更生相談所がどのような動きとってきたのかを報告する。

1) 2007年5月 短期リハ利用。

これまで、体調が悪く、家にこもりがちだったが、何かやってみたいとの気持ちから参加を申し込む。

期間中に、歩行、調理などの日常生活動作（以下、ADL）、パソコン（以下、PC）訓練を受講し、少し自信を持つ。帰宅後は、自宅周辺の歩行や、PCの購入、調理時間を増やしたいなどの前向きな発言が聞かれた。また、盲導犬歩行も体験してみたいとの希望があり実施する。

2) 2007年5月 盲導犬取得申込。

これまでは両下肢機能障害のため、盲導犬歩行を諦めていたが、短期リハ中の盲導犬体験歩行により、自分も盲導犬と共に歩けるのではないかと希望を持ち、短期リハから帰宅する前に盲導犬取得の申し込みを行う。

3) 2007年6月 在宅訓練希望。

短期リハでPCに興味を持ち、日常生活でもパソコンを有効に利用したいとの思いから在宅訓練を希望。当協会へ連絡が入る。

ここまでは当協会の単独事業により、協会独自で支援を行っていた。しかし、Bさんが在宅訓練を希望したことにより、更生相談所、支援センターも支援者となる。

委託契約に基づき、支援センターと共にBさんの面接を実施。希望を確認後、日常生活の中で、情報収集のためにPC訓練が必要と判断。その他、生活面で不便な点がない

いことから、今回はパソコン訓練のみとし、在宅訓練申込の手続きを支援センターが実施。委託契約元の更生相談所が審査後、在宅訓練実施を決定。

4) 2007年6月 在宅訓練開始。

パソコンで情報収集するために、メールの送受信、ホームページ閲覧などの内容で訓練計画を立て、当協会が訓練計画書を作成し、訓練を実施。

5) 2008年3月 在宅訓練修了。

在宅での訓練も熱心に取り組み、訓練の予習や復習を行う。また、友人とメール交換をし、ニュースや天気を確認するなど、積極的にパソコンを活用する。

訓練は35回で修了したため、実施した訓練内容をまとめた報告書を作成し、Bさんと家族に対して確認と説明を行う。

6) 2008年5月 再度、在宅訓練を希望。

将来の盲導犬歩行のためには、自宅周辺の環境を把握したいとの理由で、本人より、再度、在宅訓練の希望が出る。

当協会と支援センターで面接を実施。Bさんの希望を確認後、盲導犬取得のために自宅周辺の地図が頭の中で描けるような訓練と、体力アップが必要と判断。また、自宅のリフォームに伴い、新しいキッチンの使い方などのADL訓練も必要と判断し、白杖歩行とADL訓練の申込み手続きを支援センターが行う。委託契約元の更生相談所が審査後、訓練実施を決定。

7) 2008年6月 在宅訓練2開始

点字郵便返却のために、自宅から5分ほどのポストまで往復するルートから歩行してみたいとの希望が出る。希望を確認後、訓練計画書を作成し、訓練を実施。

5. 現在の様子

これまでは、夫の見守りにより、10mほどの距離を歩行するのみで、多くの場合、夫やヘルパーの手引きで歩行していた。しかし、

現在では、白杖を利用してポストまでの往復が可能となり、自宅周辺のコンビニエンスストアや駅までの単独歩行も可能となっている。また、曖昧であった自宅周辺の路地などを把握し、将来、盲導犬と歩行するための散歩コースを、自らが考え、設定しようとしている。さらに、医師の勧めにより、プールへも通い始めた。水中ウォークをすることで筋力・体力がアップし、歩行訓練の際にも前かがみだった姿勢が良くなり、白杖も大きく振れるようになってきている。

日常生活においては、これまでは調理をする際にガス台を利用していたが、自宅のリフォームが終了したため、ADL訓練として、新たなキッチンについて訓練を実施している。ガス台からIHクッキングヒーターに変わったことで、鍋を置く位置が確認できなくなったため、道具や手を使って鍋の置き方の訓練や、調理道具の整理など、本人が利用しやすい方法、手の動かし方を確認する訓練を行い、ガス台利用時と同様に調理が可能となってきている。

また、以前に訓練を実施したPCは生活道具の一つとなり、訓練に関する質問などはメールでもやりとりするようになった。

6. 今後について

2008年10月にはケア会議を予定しており、訓練の経過報告、訓練修了後の支援について話し合いをすることとなっている。修了時には、実施した訓練内容をまとめた報告書を作成し、Bさんと家族に対して説明を行う予定である。

7. 考察

Bさんは、短期リハに参加したことで、希望の訓練を集中的に体験することができた。それにより、自分にとって必要な訓練が何なのかを判断し、在宅訓練実施につながった。在宅訓練を利用することで、日常の生活リズム

ムを変えることなく訓練が受けられ、心身への負担も少なく、PC訓練から歩行訓練、ADL訓練といったように、少しずつニーズが顕在化し、訓練を利用することで生活を改善していくことができた。さらにサービス形態は異なるが、短期リハー盲導犬申込—在宅訓練1—在宅訓練2といったように、訓練内容をステップアップさせることができた。

また、盲導犬歩行を体験したことにより、盲導犬との歩行や生活をイメージすることができた。これをきっかけに盲導犬取得という新たな目標を持つことができ、白杖歩行訓練利用に至った。

内面的な変化としては、短期リハで自信を持ったことにより、興味のあるものには挑戦してみようという気持ちが表れた。これは最初の関わりから現在に至る1年半の間、訓練が進むにつれBさんの言動から感じ取れたことである。

さらに、当協会だけでなく支援センターや更生相談所との関わりを持ち、利用できるサービスの選択肢が増えたことで、今後の生活範囲が広がる可能性がある。

8. まとめ

サービスを利用するための形態を複数提示することにより、利用者が自分に合った形態を選択し、徐々にステップアップしながら、更に必要なことを発見していくことが可能である。

現在の仙台市在住者に対する生活訓練事業は、当協会の実施する生活訓練だけでなく、生活訓練を利用する前、あるいは、利用後の利用者に対してサポートできる体制がある。生活訓練のみで解決できるであろう課題であっても、その他に必要な支援はないのか、本当に生活訓練だけで解決可能なのかどうかを、複数の団体で確認することは、利用者だけでなく、各支援者にとっても有益なことである。